
僕は貴女に私はあいつに

伊藤勇作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は貴女に私はあいつに

【Zコード】

Z7876D

【作者名】

伊藤勇作

【あらすじ】

私の名前は明善棗、あいつの名前は鏡家俊一、幼馴染でもあるし、私の執事でもある。そんな私とあいつのちょっと変わった関係の物語です。

(前書き)

これは自分にとって始めての短編。
出来れば感想と評価をお願いします。

「もう一体何やつてるの！？」

日曜日の朝から怒鳴り声が響く。

原因は、あし一が和の部屋においてあした花瓶を倒したからだ。

「す、すみません！」

見た目は私と同じくらいで、気の弱そうな少年が、何度も頭を下げる
ながら謝っている。

何度も頭を下げて、下げる、下げる……って下げるすぎだ！？

「もつ良いから他の所に行つてきなさい」

呆れたように私が言つたら。

「いいから口答えしない」

「でもまだ・・・・・」

あーつ！もう二つて言つているのにー？

「行きなセーー」これは主の命令よー。」

私がきつく言つたら、あいつは流石に諦めた。

「は、はい一分かりました」

その少年は怖ず怖ずしながら下がつて行き、出て行く瞬間に一言だけ言つた。

「……すみませんでした。お嬢様」

そう恥いて彼は出て行つた。

「……はあ」

何となくため息が出る。

私ってそんなに怖いのかな？

とちゅうと落ち込んだりしながら、あいつの事を考えた。

あいつの名は鏡家俊かがみや しゅん
この私、明善めいぜん棗なつめの執事をやつてこる。

歳は私と同じ十五歳

あいつは小さい頃からここに一緒に住んでいる。そのため、幼馴染と言つてもあながち間違いじゃない。何でここに住んでいるのかといふと、あいつの父親が、私の父の執事をしてこる。そのため、住み込みで親子で一緒にすんとしていると言つていい。

所で、なんで彼が私の執事をしているのかと言つと、これにも色々理由があるのだが、まあ分かりやすい理由を一つ挙げると修行のためである。鏡家の子供は十一歳になると、立派な執事・メイドになるべく修行しなくてはならこらし。そのための修行場として、現在私の執事をやつてこっている。

だけどね……あいつ……執事に向いてないんだよね

周りを見てみると倒れた花瓶、散らかった服、バラバラに落ちている本。

これらはあいつが朝、私を起こしに来た時に色々失敗してこうなったのだ。

「・・・・・はあ」

なんであいつが私の執事なんだろう

私は執事なんて欲しいと思わない

それに・・・・私はあいつの言い方が気に入らない！！

昔は棗つて呼んでいたのに・・・・急にお嬢様つて呼ぶようになつたんだよ！！

確かに私はあいつの主だけビ・・・・あればないでしょうー？あれは！！

あいつ、執事になつた途端急に態度が変わつたんだよね・・・・本当に・・・・なんでこつなつちやつたのかな？

「はあ・・・・・」

何か色々考えていたら少し泣きたくなつてきました。

けど、これだけは言える。

私は執事なんて要らない！

だから少しだけ、本当に少しだけいいから・・・・私に構つてほしい。

好きな人に・・・・ちゃんと構つてほしい。

そう思いながらベットに転がつた。

「はあ、また怒られたな・・・」

毎度の事だが、かなり落ち込む。

本当はちやんとして褒めてもらひべきなんだろ? けど・・・

「・・・はあ」

褒めてもらひたいとか嫌われるんじゃないかな?
自分で疑問に思った言葉にさらに落ち込む。

・・・・・どうして僕が執事をやつているんだろう?
ただでさえ鈍臭い僕が執事に向いているはずない。
まあ、うちの家系がエリート執事・メイドってのは分かるけど・・・
・どうも僕は向いてないような気がするんだよな。
それに・・・いつも棲に迷惑をかけてるし。

「・・・はあ」

ため息しか出でこない。

昔だつたらこんな事には悩む必要なんてなかつただろうな。
と少し昔の事を思い出しながら・・・・・懐かしむように笑つた。
昔はただの泣き虫だつたのに・・・・・あんなに可愛くなちゃつて。
そう言えば、その頃はまだ棗の事をお嬢様つて呼んでいなかつたよ
な・・・・

色々思い出してちょっと懐かしくなつたな。
ま、こいつなつてしまつたからこは真面目にしないこと。

「さて・・・・午後の仕事に入るかな」

それに・・・・まだ棗の執事だからいいかな。
そう考えたら、まだ少し嬉しい。

・・・・だけど。

「今の僕は執事だからな」

少し悲しそうに空を見てから呟いて、棗のいる部屋に向かつた。

「・・・・・ん？」

あたりは暗く月明かりのみで、部屋の電気がついていない。
もしかしてあの後寝ちゃった？
一日中寝てた？

貴重な休みの日を泣き寝入り？

・・・・恥ずかしいな。

顔が赤くなるのを感じながら急いでベットから出る。
・・・・出る？

「あれ？」

そう言えば私いつの間にベットの中に入つたっけ？
それに周りを見たら、朝の悲惨な状態とは違つて部屋が片付いる。

「うーん、奇怪現象でも起きたのかな？」

そう思いながら部屋の電気スイッチの方を見たら、スイッチがある
場所に、誰かがイスに座つていた。

「・・・・誰？」

ここからだと月光の影になつて見えない。
少し見える部分だけ推測すると多分男。

「何か言いなさい……」

少し怖くなつて大きな声を出した。

「……

しかし相手はなんの反応を示さない。

・・・・あら?

「もしかして寝てる?」

恐る恐る近づいてみたら・・・・

「・・・・寝てる」

イスに座つて壁にもたれるよつこスヤスヤと寝ている。

しかも、その人物は鏡家俊一であった。

「驚かせないでよ」

寝ている人物に言つても仕方がないが、一応文句だけは言つておぐ。

「……

なんだか寝顔を見てたら変な気分になつてきた。

微妙に頬を赤くしながら、周りをきょきょきょと見渡し・・・・

「よし、誰もいない」

微妙に挙動不審になりながらも、彼の隣の空いている席に座った。

「うわあ・・・・・・」

距離が近い。

しかも、いつもと違つて無防備だ。

俊一を見ていると、自分の顔が熱くなるのが分かる。

それに・・・・・可愛い。

中性的な顔だからかもしれないけど、寝ている姿はなんというか・・・

・・愛らしい。

まあそんな事を言つたら多分拗ねちゃうと思つけど、実際そうなのだから仕方がない。

「うふふふ

何か得した気分だ。

それに私が寝ている間に色々してくれたんだらう、現に私の部屋は見事に綺麗になつていて。

・・・・・何かお礼をした方が良いのかな?

俊一の顔を見ながら考え・・・・・良い方法を思いついた。

・・・・少し恥ずかしいけど・・・・・寝てるから大丈夫だよね。

さらに自分の顔が赤くなるのを感じながら・・・・

「・・・・・今日はありがとうね

俊一の額に軽くキスをした。

・・・・・願わくば、俊一が執事でなく、自分の意思で私の側に居る

なんだか不思議な夢を見た。

棗が僕にお礼を言いながら、キスする夢を・・・・・

だけど・・・・別に嫌じゃなかつた。

自分でも分からぬいけど、とても嬉しい気分だ。

こんな夢が見られるなら、あらがじ予め、棗が寝ている間に部屋を仕付けて置いてよかつたと思ひ。

こんな夢のよつて・・・・明日は褒められると頑張るわ。

棗のためこも、明日が良じ日になつますよつて。

(後書き)

この作品は本来長編（連載）物として出すはずだったのを、短編に
したものです。

もし評判が良かつたら、ちゃんとした連載物にしたいと思います。

By 伊

藤勇作

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7876d/>

僕は貴女に私はあいつに

2010年12月29日02時15分発行